

高等学校における文学史授業の一つの試み

——古典文学作品への親しみのために——

栗 林 三 千 雄

まえがき

高等学校における文学史の授業は、まとめて行なうばあい、大抵高三で行われて、大学入試のための対策ということを主な目標にしている。これは、わたしだけではないと思う。そして入試のための授業というものは、知識の羅列に終って、生徒の興味をそよりにくく、おそわるものも、教えるものも、いやな授業の一つになってしまふ。

わたしがひきうけた昭和三十一年度は、わたしの当った組が、とくに程度がひくかったせいもあつたらう、非常に苦しんだ。そして翌年、文学史をひきうけたとき、その生徒が三年間もち上ってきた生徒だったので、授業中、あまり生徒に注意をさかないで教える内容に集中できると、何とか、単に知識の羅列に終らないように努力したいと考えた。

その年と、その翌三十三年、更に一年とんだ三十五年度と三年かかって、生徒が日本の文学的古典への関心をもち、親しみを感じるようにという方向づけへの努力をかさねてきた。現在でも、勿論、

十分とは考えていないが、一応、それをまとめてみたいと思う。

対象 高等学校三年普通科(進学クラス)
 時期 昭和31 32 33 35年
 教科書 32年度「日本文学史」角川書店(本文211頁)
 33 35年度「新訂日本文学史新講」中央図書出版社(本文141頁)

配当時間 一週 二時間

時間配当表

月	週	予 定		中央	施
		単元配当	教科書頁		
4	2	古代(奈良)	32年	1	33年
5	3	〃(平安初期)	〃	36	〃
6	4	古代(平安中末期)	〃	37	〃
4	2	古代(奈良)	32年	1	33年
5	3	〃(平安初期)	〃	36	〃
6	4	古代(平安)	〃	37	〃
4	2	古代(奈良)	32年	1	33年
5	3	〃(平安初期)	〃	17	〃
6	4	古代(平安)	〃	18	〃
4	2	古代(奈良)	32年	1	33年
5	3	〃(平安初期)	〃	24	〃
6	4	古代(平安)	〃	25	〃

2	1	12	11	10	9	7
1	3	2	4	3	4	2
(期末考査)	近代 (大正昭和)	近代 (明治)	近代 (明治)	近代 (明治)	近代 (初期)	中世 (期末考査)
	(大正)	近代 (明治)	近代 (明治)	近代 (明治)	中世 (初期)	中世 (初期)
170-191	151-176 (36)	150-119 (32)	118-83 (36)	82-		
	近代 (昭和)	近代 (大正初期)	近代 (明治)	近代 (末期)	中世 (初期)	中世 (初期)
141-124 (18)	123-90 (34)	89-62 (28)	53-			
	近代 (大正)	近代 (明治)	近代 (初期)	中世 (末期)	中世 (初期)	中世 (初期)
	⊗ 3	⊗ 2				
		126-95 135-130 (30)	94-58 (37)	57-		

- ⊗ 1. 33年度は中世残りを省略した。
- ⊗ 2. 昭和時代は省略した。
- ⊗ 3. 35年度は三学期に授業しないで自習とした。

受験準備のためである。

わたしのたてた予定と、実施してみての結果との一番大きくないちがいは、四月五月がおくれがちだということである。ていねいにしすぎることに原因はあるのだが、一つは生徒に興味をもたせようとして雑談が多くなるのと、一つは、やはりまだはじまったばかりで時間が十分あるので油断するためで、その点を注意して授業した三十五年度は、予定通りすることができた。

三十五年度にいいいだのは、二学期で授業をうちきるためもあった。これは、三学期を繰復習にあてるつもりで、いいいだのであるが、そのために、近代が大きっぱとなつて終つたし、三学期もあまり有効にすごされたとも思えない。三学期にも近代をくいこませた

方が、近代をゆつくりすることができてよいと思う。ただ、三学期の授業を、受験期をひかえた生徒が、おちついてきいてくれないという欠点は、残るのだが。

一 授業計画について

A 全体としての目標

(1) 羅列的になることをさけて、重点的に授業をすすめる。一つの例をあげるなら、古代の「古事記・日本書紀」に二時間をあてるが、その大半を古事記にあてて、日本書紀には簡単にふれてすませる。機械的に一時間ずつわりあてるようなやり方をさける。

あるいは、源氏物語・枕草子・徒然草など、国語甲乙で、今までに当然ならつたこと、またはならうことは、簡単にふれる程度にして、重複をさける。

(2) 人間としての興味をもたせることに、授業の中心をおく。生徒に、日本の文学的古典への親しみをもたせようとする目標のためには、実際の授業をどうしたらよいかということが、一つの課題であるが、文学作品が、人間の生きている生活そのものからにじみだたものであることを考えて、そこに重点をおけば、生徒の興味をひきつけることができるのではないかと思う。

戦後の生徒を、戦前にかれらと同じ年ごろであつたわたしたちと比較して、はつきりしているのは、生活に対して、かれらが敏感であるということだろう。

文学を、その生活からはなれた趣味と考へ、生活をはなれた芸術こそ、真の芸術だと考へる立ち場に立つかぎり、今の生徒たちとの共通な地盤を失つてしまふ。今の生徒たちの多くは、そんなもの

は、自分らに縁のないものだと思ふやうとしない。そうではこまるので、文学というものは、もつと人間の生活の中から生まれた、人間くささがにじみだたものであるということ。そして、いくら昔のものであるといっても、そこにいる人間たち、作品の主人公も、作者も、現在生きているわれわれと同じ血のかよった人間であるということ。それが生徒たちに感じられることが、大切ではないだらうか。

(3) 文学の展開を讀者との関係においてとらえる。高等学校で文学史をならう生徒の多数は、文学の研究者でもなければ、愛好者でもない。かれらはおしつけられてならっているので、進んでならうのではない。生徒たちは、多分終生、文学との間に漠然とした説者という以上の関係をむすぶことがないであらう。それを前提において、授業をすすめること。授業というものは強制される性質にあるために、きらわれないですむために、わざわざきらわれるようにするという運命におちいりやすい。もともと興味のない、無関心なことを無関心なままにおしつけるから、きらわれるのである。すくなくとも、それに関心をむけさすことができるなら、現在および将来において、文学、そして日本の古典的作品に注意をむける人々を養うことは、むつかしくはないと思う。

その点文学が一部の愛好者の手から、広く庶民のあいだに、いかにひろがっていったかをしることは、そのような庶民の立ち場にかい生徒たちの関心をよびさまし、注意をひきつける一つの入り口になることができると思う。

(4) その他

その他の目標としては、一週二時間授業であるので、その二時間

がひとまわりになるように授業の用意をする。そして、その一時間は生徒に教科書をよませたり、概説的なことにふれ、一時間は作品を中心とした説明にあてるというふうにした。勿論これは原則としてであつて、色々の事情で、例外的生じるのは、やむをえなかつた。

B 個々の目標

(1) 作品の内容の紹介。古典的文学作品を論ずるときは、これくらいは高等学校の生徒だから、知っているべきであるという前提をたてないで、むしろ、高等学校のこのごろの生徒は、なにも知らないのであるということ前提において、作品を論じなければならぬと思う。そうするなら、作品の内容の紹介をぬきにして、作品を論ずるといふようなことは、かたられる対象である生徒を無視したものと見えよう。作品については、作品をひととおり紹介したあとで、論ずることを原則とすべきだと思ふ。

(2) 作者の紹介。たとえていうなら、万葉集における大伴家持の作品を論じ、鑑賞するためには、北山茂夫氏のいくつかの著書によつて、明らかにされた当時の大伴氏の家長としてのかれの立ち場を知ることが大切である。それをぬきにして十分の鑑賞はできないのではないか。小林一茶の作品と生涯についても、同じことがいえよう。「十六夜日記」なども、教科書の「母性愛がにじみでている」といふような説明では、あまりに概念的、表面的で、真実をつかみだしてはいないではないか。領地をめぐつての人間くさい、利己的な争いが、その影にあることを忘れ、無視しての文学は、弱々しい根なし草ではないか。

して行かむとおもふ」と云へば、すくなびこねの命のりたまはく「吾ははにの荷を持ちて行かむと思ふ」と云ひき。かく相争ひて行きたまひしに、あまたの日をへて大汝の命「吾は行くにえたへじ」とのりたまひてやがてみてくそまりき。

(日本文学史(角川)、播磨国風土記)

◎ 信太の郡、東は……南は……西は……北は……古老のいはく、難波の長柄豊前の大宮に天の下しろしめしし天皇の世、小山上物部の河内、大山上物部会津、總領高向の大夫にこひて、筑波茨城の郡七百戸を分ちて、信太の郡をおく、この地はもと日高見の国なり。……(日本文学史新講(中央図書)常陸国風土記)

この二つの例文を比べてみて、そのどちらに興味を感じることができるとは明らかであろう。生徒の興味を拒否するような例文は、反つてない方がましだとさえいえよう。

※3 家持のころの大伴氏の位置については、北山茂夫氏の著書に詳しくかかれてゐる。参照—参考書

※4 短歌が技巧的となり、機智をろうするようになったのは、歌の価値からみれば墮落でも、人間として考えてみれば、それだけ智慧がつき、かしくくなったのである。アダムやイザも、ちえがついたから、天真爛漫さを失つたのである。

※5 短歌は無効用の遊びではなかった。そこには、はっきりした目的、(たとい男女間の贈答でも、宴会の席上でも)があり、かれの生活に結びついていた。いまの高等学校の勉強でも、もし、それが大学入試のためという背景をかくしてしまつたら、実に無効用の遊びに見えるものがあるではないか。

※6 内容の上からは、今昔物語から中世の扱いをする。説話とは、教訓具があるにせよ、ないにせよ、要するに世間はなしたから、人々に親しみがあがる。——この人々はいもう貴族ではない。

※7 十六夜日記には「母性愛がにじみでている。」というところ一べんの考え方は、人間的ではない。その頃の歌よみの家といふものについて調べてみるなら、もつと利己的な人間くさいものであることがわかるはずである。

※8 たとえば、明智光秀の謀反の際の里村紹巴の例のごとく、連歌の發展も連歌師がまず戦国の争乱の中を生きのびねば、ありえない。

※9 文学から感覺的な美しさや官能的快樂をのぞいてしまうことは、文学や芸術をゆがめ、たのしみや美しさを、日かげのこそくした暗いものとしてしまうことである。

一代男の幼いころの挿話をとりあげてみることに。
※10 町人が金をもうけても、その金をさらにもうけるためにつぎこむことが危険になつてきた時代になり、金のつかい道があそぶことにむけられてくる。

※11 自分の意志を屈することなく、つらぬきとおすことのために、貧窮にたえ、その長い生涯の最後までかわることのなかつたこと。

※12 一茶でも、まわりの人々でも、だれがわるいというわけでもない、個人的な原因なしに生じる不幸について。
芭蕉の特異な生涯は、かれが自分で選んだ生涯であるが、一茶や秋成のそれは、ある程度、平凡な人間が、しいられて止む

をえず、ただ自己の意志をまげようとしなかったためにそうな
っていった生涯なのである。

※13 福翁自伝の二三の挿話について、自分の頭で考えて、判断す
ること。——それが人間としての自覚である。

※14 社会組織や社会のもっている共通なものと考え方に反した思
想をもち、それに従って生きようとすることのむつかしさ。

※15 現在の大学生や小説家という目をはなれて、明治の初期であ
るということをしつかり握って考えないと、その意味がつかみ
にくくなる。

※16 名人かたぎというのは、ただひとりの需要のために、すぐれ
たものをつつ作ればよかった時代の遺物にすぎない。名人かた
ぎだつて、食うことを忘れることはできない。

※17 藤村の回想の中に、かれの若い頃は、詩をつくること、とく
に恋の詩をつくることは、何かわるいことでもしているかのよ
うな気がしていたとある。そんな明治のころであつたというこ
と。

※18 ただ自分の功名のために生きること。それは、ほんとうの文
学や芸術には、縁のとおいものではないか。

※19 社会に屈することは、たとえ自己をまげまいとする心を内に
もやしていても、やはり人生に対して虚無的となりやすい。そ
の点で封建的禁欲に生きた鷗外も、感覚的快樂しか信じなかつ
た荷風・潤一郎も系列的にはつながつている。

※20 社会と衝突しない個人というものは、結局観念的に止まって
いる。

※21 人間の利己性にどのように対するかというとき、生きるため

に自己肯定し、自分が生きるためには社会と妥協することに良
心の苦痛を感じなかった寛と、その矛盾のままに生きて妥協で
きずに自殺した竜之介との間に、さまざまの態度が生じてい
る。

※22 漱石以後の文学の流れは、非常に複雑で、これを短時間でま
とめて、しかも生徒にわかりやすく説明することは、実に困難
である。結局、概説する程度に止まることになるが、止むをえ
ない。

参 考 書

日本古典全書（朝日新聞社）

日本古典文学大系（岩波書店）

日本文学史（至文堂）

岩波講座 日本文学史

日本古典鑑賞講座（角川書店）

日本文学史辞典（日本評論社）

日本文学大辞典（新潮社）

原典による日本文学史（河出書房）

日本文学の古典（岩波新書）

◇

日本歴史概説上下（河出書房）

日本歴史講座（東大出版会）

日本史概説Ⅰ（岩波全書）

○

日本古代文学史（岩波全書）

天武天皇 (岩波新書)

日本古代政治史の研究 北山茂夫 (岩波書店)

大化の改新 北山茂夫 (岩波新書)

古代國家の解体 林屋辰三郎

中世の文学 唐木順三

中世文学の展望 永積安明

南北朝 林屋辰三郎

足利尊氏 高柳光寿

歌舞伎以前 林屋辰三郎 (岩波新書)

×

日本近世文学史 (岩波全書)

封建庶民文学の研究 森山重雄 (三一書房)

江戸時代 (岩波新書)

×

講座日本近代文学史 (大月書店)

現代日本文学史 (筑摩書房)

日本の近代小説 (岩波新書)

日本文壇史 (講談社)

自然主義研究 片岡良一

○

万葉集 吉永 登

万葉の創造的精神 北山茂夫

万葉の時代 北山茂夫 (岩波新書)

源氏物語入門 松尾 聰

源 頼朝 (岩波新書)

平家物語、石母田正 (岩波新書)

平家物語、永積安明 (誠信書房)

詩の発生、西郷信綱

三

評価と反省 1、 評価

次に掲げたのは、昭和三十五年度三学期の期末に行った考查問題と、その成績である。

すでにのべたように、この学期は、授業は行なわないで、各自自由に全体の整理復習をさせて、全体にわたる問題を出した。

まず問題を掲げる。

(文学史問題)

次にあげた(1)―(3)の文章は、それぞれが国文学史上、有名な作品の一節である。別紙の作品名の中から、適当なものを選んで、符号を、答の欄に記入せよ。

(1) をしからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子をおもふ心のやみはなほしのびがたくみちをかへりみるうらみはやらむかたなくて、さてもなほあづまのかめのかみにうつせばくもらぬかげもやあらはると、せめておもひあまりてよろづのはばかりをわすれ身をえうなきものになしはてて、ゆくりなくいさよふ月にさそはれいでなむとぞ思ひなりぬる。

(2) ぎをんしゃうじゃのかねのこゑしよぎようむじょうのひびきあり。さらそうじゅのはなのいろしようじゃひつすいのことばりをあらはす。

(3) いづれのおほんときにか、によろごかういあまたさぶらひたま

ひける中にいとやむごとなききははあらねど、すぐれてときめきたまふありけり。

(4) 北「モシあねさん湯がわいたらへえりやせう。」歌「うぬなんにもしらねへな。湯がわいたらあつてはいられるものか。それも水が湯にわいたらへえりやせうとぬかしをれ。」

(5) ヤおもしろからぬ。文三には昨日おせい「あなたもおいでなさるか」とたづねた時、行かぬと答へたら「へーそうですか。」ト平気ですましておちつき払ってゐたのがおもしろからぬ。文三の心もちでは、ならうことならゆけとすすめてもらひたかつた。それでもなほ強情をはって行かなければ「あなたとご一所でなければわたしもよしませう」とか何とか言つてもらいたかつた。

(6) このよのなごり、夜もなごり死にゆく身をたとふれば、あだしが原のみちのしも一あしづつにきえゆくゆめのゆめこそあはれなれ。あれかぞふればあかつきの七つのとかが六つなりてのころ一つが今生のかねのひびきのききおさめじゃくめついらくとひびくなり。

(7) 同じやしきのうらにいきよ立てて母おやのすまれしが此男うまれたる母なれば、そのしはきことかぎりなし。ぬりげた片あしなるを水風呂の下へたくときつくづくとむかしをおもひだし、まことにこのぼくりはわれ十八の時この家によめ入りせしとき、ぞうながもちに入れてきてそれから雨にも雪にもはきてはのちびたるばかり五十三年になりぬ。

(8) むかし男ありけり。身はいやししながら母なむみやなりける。その母がおかといふところにすみたまひけり。子は京に宮づかへしければまうづとしけれどしばしばえまうです。

(9) 十六日、空はれたれば、ますほの小貝ひろはんといひの浜に舟をはず。海上七里あり。天やながしといふもの、わりごささえなどこまやかにしたためさせ、しもべあまた舟にとりのせて、おひてときのまにふきつきぬ。浜はわづかなるあまのこいへにてわびしきほつけ寺あり。ここに茶をのみさけをあたためて夕ぐれのさびしさ感にたへたり。

(10) そこでここに思愛のちぎりもなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて本来をいうと忘れてしまったところで人情をも義理をも欠かさなで、しかもつひに忘れてしまふことのできない人がある。世間一般のものにさういふ人があるとはいはないが、少くともほくにはある。恐らく君にもあるだろう。

(11) 月もおぼろに白魚のかがりもかすむはるのそら、つめてえ風もほろよひに心もちよくうかうかとうかががらすのただ一羽ねぐらへかえる川ばたで、さをのしづくかぬれ手であわ、おもひがけなく手に入る百両。

(12) うちかすみたる空ながら月の色は匂ひこぼるるやうにて、ほの白き海はへうべうとしてかぎりをしらず、たとへばむじやきなるゆめをしけるに似たり。よせては返す波の音もねむげにおこたりて吹きくる風は人をよはしめむとす。うちつれてこの海辺を逍遙せるは……

(13) 今までではさりとともあはんをたのみにこそ知らぬあずまに下りたるに今はこの世になきあとのしるしばかりを見ることよ。さてもむざんや死のえんとて生所を去つてあづまのはてのみちのほとりの土となつて春のくさのみ生ひしげりたるこの下にこそあるらめや。

(14) ようづのことは月みるにこそなくさむものなれ。あるひとの月ばかりおもしろきものはあらじといひしにまたひとりつゆこそあはれなれとあらそひしこそをかしけれ。をりにふればなにかはあはれならざらん。

(15) 昔々たる春のやなぎ、みそのにうりうるることなかれ。まじはりはけいはくの人とむすぶことなかれ。楊柳しげりやすくとも秋のはつ風のふくにたへめや。輕薄の人はまじはりやすくしてまたすみやかなり。

(16) あづまぢのみちのはてよりもなほおくつかたに生ひいでたる人いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか世の中にものがたりといふもののおんなるをいかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひみなどに姉さま母などやうの人々の、そのものがたりかのものがたり光源氏のあるやうなところどころかたるをきくにいとどゆかしさまされどわが思ふまゝにそらにいかでおほえかたらむ。

(17) 「親のない子はどこでも知れる爪をくはへて門に立つ。」と子どもに唄はるるも心ほそく大方の人交りもせずして、うらのはたけに木がやなどつみたる片かげにうづくまりてながの目をくらしぬ。わが身ながらもあはれなりけり。

(18) いづかたへもゆかばやとおもひ、刀なくてはいかがとおもひ、針をひとつづばにこひたまへば、とりだしたびにける。すなはちむぎわらにて栴さやをこしらへ都へ上らばやとおもひしが、自然舟なくてはいかがあるべきとて、またうばに御器とはしとたべと申しうけ、なごりをしくとむれども立ちいでにけり。

(19) これも立ちつくしてふる雨そでにわびしきを、いとひもあへず

こがくれて覗ひしが、さりともしらぬ母のおやはるかに雷をかけた、火のしの火がおこりましたぞえ、この美登利さんは何をあそんで居る雨のふるに表へ出てのいたづらはなりませぬ。またこのあひだのやうに風ひからぞと呼びたてられるに、はい今ゆきますと大きいひてその声信如にきこえしを恥かしく……

(20) かくうたふをききつつこぎくるにくろとりといふとり、岩のうへにあつまりをり。その岩のもとに波白くうちよす。かちとりのいふやう「くろとりのもとに白き波をよす」とぞいふ。このことば何にはなけれども、ものいふやうにぞきこえたる。人のほどにあはねばとがむるなり。

(21) 「モシあなたエ牛は至極高味でござネ、此肉がひらけちゃア、ぼたんやもみちはくへやせん。こんな清潔なものをなせいままでくはなかつたのでござせう。……追々わが國も文明開化といつてひらけてきやしたから我々までがくふやうになつたのは実にありがたいわけでござス。」

(22) 新吉はゆうべ来たばかりの花嫁をとらえて、しょうゆや酒のよしあし、ねだんなどを教えはじめた。「この辺は貧乏人が多いんだから、皆こまかいあきないばかりだ。お客は七八分労働者なんだから、酒の小売りが一番多いのさ。店さきへきてますのみをきめこむてあいつも日に二人や三人はあるんだから、そいうやつがとびこんだら、ここのみ口をこうひねって、ますごとつきだしてやるんさ。」

(23) 行く河のながれはたえずしてしかももとの水にあらず。澁みに浮ぶうたかたはかつきえかつ結びて久しく止まりたるためしなし。世の中にある人とすみかと又かくのごとし。

② 時雄は、雪のふかい十五里の山みちと雪にうもれた山なかのいなか町とを思いやった。別れたのちそのままにしておいた二階に上った。なつかしき、恋しさのあまり、かすかに残ったその人の面かけをしのぼうと思つたのである。

③ この盗人はそのぬすみたる馬にのりて今はにげえぬと思ひければ関山のわきに水にてある所いたくも走らずして水をぶぶぶと歩ばして行きけるに、よりのぶここれをききて「ことしもそこに。」もとよりちぎりたらむやうにくらければ、よりよしがるむもしらぬに、よりのぶ「いよやあれや」といひけることも未だをはらぬに弓おとすなり。

④ 死にちかき母にそひねのしんしんと瀧田のかはづ天にきこゆるのどあかきつばくらめふたつはりにゐてたらちねの母は死にたまふなり

わが母をやかねばならぬ火をもてり天つ空には見るものもなし

⑤ 時は一月の未つ方、のっそり十兵えが辛苦経営むなしからで、感応寺生曇塔いよいよ物のみごとにでき上り段々のあしげをとり除けば、次第々々にあらはるる一階々々、また一階、五重ぎぜんとしてそびえしありさま金剛力士が魔軍をにらんで十六丈のすがたを現じ地軸ゆるがず足ぶみしていはほにつちたたるごとくあつばれみごとに立つたるかな。

⑥ 落花の雪にふみ迷ふ、交野の春の桜がり、紅葉のにしきをきて帰る、嵐の山の秋のくれ、一夜をあかすほどだにも、旅ねとなればものうきに、恩愛のちぎり浅からぬ、わが故郷の妻子をば、行くへもしらず思ひおき、思はぬ旅にいでたまふ、心の中ぞあはれるなる。

⑦ ▲べらばい、てのどいがおちたイ。なにをうかうかしやアがる。トわらいながらいふ。●下駄のはの先でぐるりとまはりながら手ぬぐいをひろひあげ、うしろをむいて貝の口をみながらくると、また犬につまづく、キャン●ちくせうめ、気のきかねへ所へうしゃアがる。▲てめえが気のきかねへくせに。ザマアみや。●そねむない。このやろう、ほうをのべをひっぱつたと思つて。なんだ。まだ湯はあかねへか。あさねなやつだぜへ。

⑧ 今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼をさますと、戸外で誰かがわが名を呼んでゐる。声に応じて外へ出てみると、声はやみの中からしきりに自分をまねく。おぼえず、自分は声を追うて走りだした。無我無中でかけて行く中に、いつしか途は山林に入り、しかも、しらぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。

作品名(解答欄を省略)

イ 東海道中膝栗毛 ロ 謡曲 ハ 古事記 ニ 山月記 ホ おらが春
ヘ 方丈記 ト 浮雲 チ 金色夜叉 リ 蒲団 ヌ 蜻蛉日記 ル
奥の細道 オ 今昔物語 ワ 破戒 カ 更級日記 ヲ 浮世風呂 タ
たけくらべ レ 三人吉三廓初賀 ソ 枕草子 ツ 大鏡 ネ 十六夜日記
ナ 雨月物語 ラ お伽草子 ム 新世帯 ウ 源氏物語 ノ 五重塔
ク 曾根崎心中 ヤ 保元物語 マ 伊勢物語 ケ 忘れえぬ人々
フ みだれ髪 コ 好色一代男 エ 赤光 テ 平家物語 ア 世間胸算用
サ 浮世床 キ 徒然草 ユ 土佐日記 メ 安愚楽鍋 ミ
にこりえ シ 太平記

(以上40の中から30を選択。)

対象生徒は、高3 H I J の三組、一五八名で、大学受験を志すものを集めた組である。H組が文科、I組が理科、J組が文理科組とわかるが、そのうちの最後のJ組が優秀者だけを選抜した組である。なおこれらは一応進学組であるが、国立大学への志願者及び入学者はすくなく、J組で地もとの愛媛大学を中心に国立大学への入学者が六名、H I組よりは一名もない。松山商大へはJ組より五名、H I組より一名。J組からは、豊応大、明治大、立命館大などへ数名。H I組からは、京浜、名古屋、京阪神の私大への志望及び入学者が主である。なお、百五十八名のうち実際に受験したのは、百名そこそこで、あとの五、六十名は就職している。

次に問題に対する正解者数と%を示す。

問題	正 答		H組58名		I組50名		J組50名		計
	名	%	名	%	名	%	名	%	
1	十六	29%	17	29%	18	36%	28	56%	63
2	平家物語	41	71%	34	68%	49	98%	124	79%
3	源氏物語	33	57%	21	42%	42	84%	96	61%
4	東海道中 膝栗毛	39	67%	36	72%	38	76%	113	72%
5	浮雲	28	48%	20	40%	35	70%	83	53%
6	曾根崎心中	22	38%	24	48%	28	56%	74	47%
7	世間胸算用	3	5%	2	4%	9	18%	13	8%
8	伊勢物語	29	50%	26	52%	36	72%	91	58%
									158

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
赤	今昔物語	蒲団	方丈記	新世帯	安愚楽鍋	土佐日記	たけくらべ	お伽草子	おらが春	更級日記	雨月物語	徒然草	謡曲	金色夜叉	三人吉三廓初買	忘れえぬ人々	奥の細道
8	13	34	17	49	50	12	14	31	21	17	1	9	18	36	31	24	7
14	22	59	29	85	86	21	24	54	36	29	1.7	16	31	62	53	41	12
8	4	25	13	39	40	8	11	21	17	12	2	8	15	29	25	25	5
16	8	50	26	78	80	16	22	41	34	24	4	16	30	58	50	50	10
12	21	41	31	42	50	26	20	35	22	25	0	20	25	32	26	28	9
24	42	82	62	84	100	52	40	70	44	50	0	40	50	64	52	56	18
28	38	100	61	130	140	46	45	87	60	54	3	37	58	97	82	77	12
18	24	63	39	82	89	29	29	55	38	34	1.9	23	37	61	52	49	13

27	五重塔	55名	95%	40名	80%	47名	92%	142名	90%
28	太平記	0	0	0	0	1	2	1	0.6
29	浮世風呂	28	48	25	50	27	54	80	51
30	山月記	52	90	45	90	49	98	146	92

2、反 省

いまあげた正解者数の表から、はじめに、よくできたものを、順にあげる。よくできたという標準を全員の半分ができたというところにおく。「忘れえぬ人々」が四九%であるが、こゝまで入れると、半分の十五の作品について、全員の半分が正解したことになる。

1、よくできたものから。

作品名	①	②	③	④	⑤
山月記	92%	90%	○	/	×
五重塔	90	80	/	/	△
安愚楽鍋	89	80	/	○	○
新世帯	82	78	/	○	○
新家物語	79	68	/	○	△
東海道中膝栗毛	72	67	/	△	△
蒲団	63	50	/	○	○
金色夜叉	61	58	/	○	○

- ①全員中、正解者の%
- ②3組中、最もできていない組の%
- ③○印は、三年間に国語甲乙でならった文。
- ④○印は、問題に出した文が例文として、文学史教科書にでている。
- ⑤○印は授業中にその作品について説明したもの。

△印は授業中にその作品について少しふれたもの

2、できていない方から。

源氏物語	61	42	○	/	△
伊勢物語	58	50	○	○	△
お伽草子	55	41	/	/	△
浮雲	53	40	/	/	○
三人吉三	52	50	/	/	○
浮世風呂	51	48	/	/	△
忘れえぬ人々	49	40	○	/	×

○印は授業中にその作品について、ほとんど、あるいは全然ふれしなかったもの。

作品名	①	②	③	④	⑤
太平記	0.6%	2%	/	/	×
雨月物語	1.9	4	/	○	△
世間胸算用	8	16	/	/	△
赤奥の細道	13	18	/	/	×
徒然草	18	24	/	/	△
今昔物語	23	42	/	○	×
たけくらべ	29	40	/	○	△
おらが春	38	44	○	/	△

- ①③④⑤は1の表に同じ。
- ②は3組中、最もできていない組の%

参考 1、

蒲団の出題文は、例文に出ている所から少しずらして出してみた。

- 金色夜叉・三人吉三は、出題箇所を教室内で朗読した。
- 浮雲は、あらずじを説明しただけ。

⊗ 太平記の出題文は古來有名であるので、どのくらい知っているかと思つて出してみたのである。

⊗ 奥の細道は、國語甲で教えたが、有名個所をわざとさけて出題してみた。

(参考2) 土佐日記は全員中、正解者の%が29%であるが、最もよい組が52%と、半分をこえて正解しているの、除いた。更級日記・謡曲も、それにならつて除いた。

右の二つの表を参考として、反省してみるのに、当然のことであるが、文学史の授業で教えたことに比例している。

たとえば、安愚理鏡、新世帯、浮雲、蒲団のように、文学史の授業以外では、全然その耳目にふれていないと考えられるものがよくできていて、太平記、雨月物語、赤光のように、授業中に、ていねいにふれなかつたために、知識のないものの出来がわるい。

しかし、第二の特色として、文学史の授業では教えないで、とおろすことでも、教室外の知識として、もっているものに関しては、よくできているものと、案外わるいものがあった。

五重塔、膝栗毛、金色夜叉など、できている方の例であるし、たけくらべなど、美登利、信知という人名を出したのかかわらず、不出来であった。

授業中に詳しくしなかつたのは、生徒の教室外の知識をあてにしたのであるが、このような常識については、十分にわかつていない。なぜ五重塔があのようによくできているのに、たけくらべがわからないのか。どうも、よくつかめない。

第三に、國語の甲乙で三年間になつたことが、案外あてにならなかつた。山月記のように特異な印象的な文は記憶につよく残るよすがだが、古文に關しては、だめなようだ。

これから第四の反省が生まれる。

古文の勉強は、大学進学をめざして、自分でよく努力しているものは、よくしている。しかし、たとえ大学進学を希望するものでも、自分で日ごろ受験勉強に努力していないものは、古文ができない。これは組でいうと、J組と他のH I組との差となつて表われている。それを表にして示す。

作品名	①			②			③			
	徒然草	今昔物語	土佐日記	更級日記	方丈記	十六夜日記	浮雲	伊勢物語	源氏物語	蒲団
	23	24	29	34	39	40	53	58	61	63
	40	42	52	50	62	56	70	72	84	82
	16	22	21	29	29	36	48	52	57	59
	24	20	31	21	33	20	22	20	27	23

① 全員中の正解者の%。
② 上がJ組の%。下がその次の組の%。
③ その差。

右の表は、優秀組であるJ組と、その次によかつた組との差が20%以上あるものをとりだしたのであるが、十の作品中、ほとんどが古典で占められている。その差の大きい方丈記や源氏物語など、有名な個所であるにもかかわらず、古文を勉強しないものには、無縁なのである。一応、大学進学をめざすものでさえ、そうである。高校を出て、就職しようと思つているものにとつては、古典は、習つても、その頭の中をとおろすぎていつてしまつて、何の印象ものこさないものとなつてゆくらしい。これは文学史の授業というよりは、日本の古典を青少年に、どのように親しませるかという大きな問題になる。そして、このわたしの文学史の授業も、それに対するひとつの手さぐりなのである。

(三七一・四)
(鯉城中学校教諭)